あきらめない心

オリンピアンにインタビュー

子ども記者は4人のオリンピアンから、オリンピックバリュー（価値）を学んだ＝毎日新聞社提供

大切なのはフェアプレー精神

私は、オリンピアンの方たちの話を聞き、なぜ、オリンピック・パラリンピックなどに出た人がこうえん会などを開いたり、学校で話をしたりするのか、分かった気がしました。スポーツをする人は、競ぎに関わらず、みんな一生けん命ベストをつくしてがんばっています。勝ちたいし、負けたくない。けれど、試合が終わった後は、あく手したり、他の選手を応えんしたりしています。それは実はむずかしくて、とてもりっぱで、すごいことです。勝ちたいけど、他の選手にもがんばってほしい。それが、フェアプレー精神です。フェアプレー精神が無ければ、ズルやドーピングで、競ぎはぐちゃぐちゃになってしまうでしょう。ベストをつくすけど、相手をそんけいすることは、スポーツだけではなく、どんなことにも必要で、人間的にも大事なことだと思いました。

（小5／N・M）

オリンピアンと写真におさまる子どもたち

相手を尊敬すること

友達が世界中に

出演したみなさんにインタビューもさせていただきました。

オリンピアンはオリンピックに出て「世界中に友達ができた」と話していました。目標に向かうあきらめない心を持てるようになれたり、毎日楽しい日々を過ごせたり、外国で日本ではできない経験ができたりしたこともあったそうです。

試合の前などできん張する時は、自分ががんばろうとしている合図と受け止めて、いつもと同じことをするそうです。私もリラックスしたいときこのお話を思い出したいと思います。

（小5／S・T、E・S、小6／M・M）

ホストタウン ドイツのオーケストラ

親善交流演奏会

「第9」にゾクゾク

文京区は7月13日、文京シビックホール大ホールで、来年のオリンピック・パラリンピックで文京区がホストタウンになるドイツにスポットを当てた日本×ドイツ親善交流演奏会を開ざいしました。

演奏会にはドイツのライプツィヒ・ユースシンフォニーオーケストラ、東邦音楽大学管弦楽団による演奏に、地元小学校の合唱団も参加して「赤とんぼ」と「ふるさと」を歌いました。なじみのある曲を合唱とオーケストラできくと、新せんな感じがしました。

ドイツの作曲家、ベートーベンの交響曲第9番はシビック合唱団も加わり、ゾクゾクするくらいすばらしかったです。

（小6／K・F）

一しょに音楽を作る

東邦音楽大学管弦楽団の指揮者、上野正博さんにお話を聞きました。一番心に残ったことは、きん張の中にも「アガってしまうきん張」と「アガらないきん張」があり、きん張感は持つけれど、ガクガクしないのが本当のプロだということです。オーケストラの合わせる練習は本番までに3回しかやっていないということに驚きました。「どのような方法で心を一つにしましたか」とたずねると、「先生が生徒に教えるのではなくて、一しょに音楽を作っています」と教えてくれました。

（小6／H・I、M・M、小5／H・A）

「愛と友情」がテーマ

ドイツ人指揮者のロンディルク・エントロイトナーさんにもお話を聞きました。日本に来るのは4回目で、日本人については「親切で、整理ができており、前から準備する」と感じているそうです。今回演奏された曲は「日本とドイツの、お互いの愛と友情」がテーマとのことでした。

（小6／S・K、Y・N）

参加国・地域と交流

「ホストタウン」とは、東京2020オリンピック・パラリンピックに向け、参加国・地域との交流を図る団体のことです。ホームステイの生徒や公式訪問団のはけん・受け入れ、文化交流イベント開催などをします。

（小6／K・F）

姉妹都市きっかけ

文京区はドイツの街カイザースラウテルンと1988年に姉妹都市となっていたことで、ドイツのホストタウンとなりました。カイザースラウテルンは、広さは文京区の約12倍（140キロ平方メートル）ですが、人口は約10万人と半分ほどです。

（小6／S・K）

東邦音大管弦楽団＆小学校の合唱団

子ども記者の取材を受ける（上）東邦音大管弦楽団指揮者の上野さん（下）ドイツ人指揮者のロンディルク・エントロイトナーさん（左）